日本ジオパーク認定

奥深き鳥海山・飛島

第1部 特徴と歴史

① 二つの〝火山〟の関わり

酒田市、遊佐町、秋田県にかほ市、由利本荘市の4市町をエリアとする「鳥海山・飛島ジオパーク」が、本県関係で初めて「日本ジオパーク」に認定された。「大地の公園」を意味するジオパークは、地球を学び、丸ごと楽しめる場所。貴重な地形や地質を備えると同時に、その地域で生活する人々が独自の文化を育み、歴史を刻んでいる。鳥海山・飛島の特徴や歴史を紹介する。

◇

伝説が示唆する類似点

「飛島は噴火で飛んだ鳥海山の山頂」「鳥海山にいた化け物『手長足長』を退治するため慈覚大師が経を読むと、不動明王の目から稲妻のような光が出て山頂を吹っ飛ばし、飛島ができた」。庄内には飛島が鳥海山の一部であるという民話や言い伝えが数多く残る。学術的には鳥海山は約60万年前からの火山活動が、飛島は1千万年以上前の海底火山の噴火が始まりで、起源の時代が大きく異なる。しかし、多くの類似点、関係性が存在する。

鳥海山は火山活動が約60万年前に始まって以降噴火を繰り返し、流れ出た溶岩が何層にも重なっている。一方の飛島は、海底火山のてっぺんに当たり、1千万年以上前に海底火山から吹き出した噴出物が海底に積み重なって隆起し、波や雨風に削られてなだらかな島になった。どちらもほとんど火山岩でできているが、飛島の地層の方がずっと古く、現在の形も異なる。

鳥海山山頂が大きく崩れ、秋田県にかほ地域の大地をつくった噴火が紀元前466年にあったことは、国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センターで年代学研究室長を務めた光谷拓実同研究所客員研究員による埋もれ木の年輪年代測定法・放射性炭素年代測定法分析調査で分かっている。しかし、時代が古すぎるため、この事実から飛島が鳥海山の一部という言い伝えにつながったとは考えにくいという。

鳥海山から見える飛島。鳥海山の山頂だったなどという言い伝えが残る　＝遊佐町・大平山荘近くの展望台

民俗学の視点で見ると、神社からも鳥海山と飛島の強い結び付きがうかがえる。鳥海山は古くから山そのものが「大物忌神（おおものいみのかみ）」としてあがめられており、山頂付近には鳥海山大物忌神社の本殿がある。対する飛島には、風の神を祭る小物忌（おものいみ）神社がある。

いずれも少なくとも10世紀には書物に記録され、毎年7月14日には両神社で同時にかがり火をたき、火の見え方でその年の大漁と五穀豊穣（ほうじょう）を占う「火合わせ」の神事が行われる。鳥海山・飛島ジオパーク構想推進協議会の岸本誠司専任研究員は「両神社は一対のものと考えるのが自然。鳥海山、飛島とも日本海航路の重要なランドマークとしての役割を果たしていたことが大きな要因ではないか」と分析する。

植生にも類似点があり、鳥海山で見られる「ニッコウキスゲ」の変種「トビシマカンゾウ」が飛島に自生している。

こうした多くの類似点、関連性から、住民たちは鳥海山と飛島を対のものと考えてきたのだろう。

（酒田支社・坂本由美子）